

日使頭祭

平成31年4月6日(土)

4月6日(土)、京都・大山崎の油祖離宮八幡宮において恒例の日使頭祭が行なわれた。当日は満開の桜の中、メーカー、販売業者、関係団体の代表者ら油脂業界から100余名が出席。また総代会、地元関係者も多数出席し、油脂業界のさらなる繁栄や参拝者の無病息災を祈願した。

本年の日使頭(ひのかしら)は一般社団法人日本植物油協会の八馬史尚会長(㈱J-オイルミルズ社長)が務められ、午前11時開式、献燈の儀、湯立の神事、祝詞奏上、玉串奉奠などの伝統神事後、次のように挨拶された。

「本日も古式ゆかしく、また、素晴らしい天気、桜の花に恵まれる中、日使頭祭の祭礼が厳粛に執り行われたことにお祝いを申し上げる。私も初めての日使頭の大役に大変緊張している。また、本日は遠方より多くの関係者の皆さまがご多忙の中、ご出席いただいたことに御礼申し上げます。離宮八幡宮は貞観元年(859年)にこちらにご神体が祀られ、翌年の860年に神社が創設された。その後、神社の神官が長木を開発し、えごま油の搾油を始め、朝廷より油祖の名を賜ったと聞いている。また、油脂の専売権を獲得し、それが今日の油脂産業の基盤となったと理解している。ただ、その道のは決して平坦なものではなく、応仁の乱や禁門の変による消失や鉄道開発等の激変を乗り越え、現在の社殿は昭和になって再建されたところだ。その後平成25年には本殿などが文化庁の登録無形文化財になるなど、関係する皆さまのご尽力によってその価値を今日まで高めてきた。今週4月1日に新元号の発表があり、連日多く報道されている。今回は国書の万葉集から選ばれたわけで、それに伴い日本の古典に改めて注目が集まっている。日使頭祭については、百人一首で有名な藤原定家もこの祭りに山崎民家がことごとく関わったと記載されていることから、地元の皆さまとの深く、長い絆を感じるし、そしさまざまな試練を乗り越えて今日まで来られたという事実をもって、油祖離宮八幡宮がいかに重要な役割を果たしてきたかがうかがい知れる。去年は台風の影響を受け、一部の施設が損壊し、関係の皆さまが復旧に向けて努力されているところである。私ども崇敬会は昭和61年に発足し、神社の発展に取り組みさせていただいているが、今後も一層の努力を傾注していく所存である。かつてはえごまを原料とした灯明から、現在は食用が主たる用途へと大きく広がってきている。ただ、その中でも生活を支える基礎素材をお客様にお届けするといった役割はいつの時代においても変わることなく、そのことに会員一同が志を一つにして、また、変化の時代においても伝統を重んじつつ、変化に対応していくという気持ちを持ち合わせるということが、この日使頭祭の業界にとっての今日的な意義であろうと考えている。これからの令和の時代においては、国内の人口減少、高齢化いよいよ本格化する一方で、このところは会員各社の皆さまの研究開発、情報発信のご努力よって、油の価値が再評価されてきているところである。

これからの令和の時代においても、製油業界がますます発展するよう、みんなで力を合わせて行くことをお願いしたい」と話された。

その後は社務所にて直会が開かれた。直会は崇敬会木村治愛副会長の挨拶に続き、全油販連宇田川公喜会長の乾杯の音頭で懇談会に移った。今年も境内では、長木と呼ばれるえごま油の搾油機の修復したものが紹介され、搾油の実演もされた。油の歴史を知るうえでも有意義な祭りとなった。



湯立神事



日使頭による玉串奉奠



日使頭 八馬日油協会長の挨拶



離宮八幡宮 宮司挨拶



崇敬会 木村副会長の直会挨拶



全油販連 宇田川会長の乾杯

(写真提供 油脂特報社)